

説教 「救いと二つの名前」 山本護 牧師
聖書 イザヤ書8:10/マタイによる福音書1:18~25

ルカ福音書では、天使による受胎告知がマリアに告げられている。マタイ福音書では、それが養父となるヨセフに告げられている。

ルカは女に降誕証言の任を与え、マタイでは信憑性ゆえに男の任としている、という見解がある。マタイの待降節記述にマリアは登場しない。だが「聖霊によって身ごもっている(マタイ1:18)」がための苦難を沈黙で表すかのような、不在ゆえの重さが予感させられる。

社会状況や場面の考察は後回しにし、何よりも、注目すべき二つの名前に目をとめよう。

「マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである(1:21)」。「イエス」、これが第一の名。

「〔見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる〕。この名は、〔神は我々と共におられる〕という意味である(1:23)」。「インマヌエル」、これがもう一方の名。

「名は体を現す」の金言のように、この二つの名は神の御子を明確に言い表している。

「イエス」とは、よくあるヘブライ名で「Ieshua」。旧約聖書の「ヨシュア記」と同じで、名の謂は「彼は救うだろう(ioshua)」。これを名の語意に重ねて、「イエス=自分の民を罪から救う(1:21)」と記された。

それでは、どのようにして民を救うのか。そもそも私たちが「救われる」とは、いったいどのようなことなのか。イスラエルの民も、私たちも、いったい何から救われるのであろうか。

イエスの降誕は、「インマヌエル=神は我々と共におられる(1:23)」ための、突然の出来事であった。神は、罪人たる我々と永遠に、共に在ることを決断なさった。降誕はその確かな徴だ。

一方的に神が罪人たる民の傍らにやって来た。私たちは、やがて御許に召されて潔められるにしても、今はここで、この姿で、罪人のままで赦されている。これが救いではないのか。

悔い改めたら赦される、ではない。潔くなって救われる、ではない。十字架の赦しが先にあり、私たちはそれに感応して悔い改める。

婚約者マリアの妊娠を知り、ヨセフは恥辱を堪えて「ひそかに縁を切ろうと決心した(1:19)」。しかし夢に現れた天使の言葉に従い、結婚を決意する(1:24~25)。

決意をしたとはいえ、胸のモヤモヤは晴れなかつただろう。

降誕が実現し、ヨセフは家族を守った後(2:13~15,19~23)、忽然と消えてしまう。

この素朴な、田舎大工の、無口な職人の一徹さが、マリアと幼子イエスを守った。

あの時、ヨセフに縁を切られていたら、マリアはどうなってしまったか。エジプトへ逃亡できなかつたら(2:14)、幼子イエスはどうなっていたか。

そしてイエスの生存はまた、膨大な数の男児を犠牲にした(2:16)。

イエスとインマヌエル。この二つの名を私たちは受け取り、今の時期には二つの名に示された救いを改めて胸に刻む。天が地に結びついた救いの奇跡だが、関連して人間の地平に起こった出来事も、忘れずにしっかり記憶しておきたい。

苦難を負って沈黙に沈んだマリアのこと、黙々と使命を果たした素朴なヨセフのこと、そして殺された膨大な男児のこと。私たちは彼らの想いを担って先へ進む。

人間は計らい、数や力を頼みにするが、それは「挫折し、実現することはない(イザヤ8:10)」。「神が我らと共におられる(インマヌエル)のだから(8:10)」。

私たちは挫折しても、神が共にいて整えて下さる。



《おまけのひとつ》

二つの名が響き合い 干渉し合って力あるうなりとなる イエス=民の救い インマヌエル=神我らと共に居まし給う 世の片隅に生じた二つの名 人と人の間で響き合い ここでも共振している